

## 特別活動への参加を通して、 学生は実践的指導力をどのように身につけるのか —— 中学校の体育祭を支援することによる効果の検討 ——

華頂短期大学 浅田 瞳 教育学部 原 清 治

### 抄 録

近年の教職課程に在籍する大学生の多くは、学校現場に赴き、児童生徒のさまざまな活動をボランティアやインターンシップ等を体験することにより、実践的指導力を涵養している。その時、大学生は現場でどのような学びを得ているのだろうか。

本論文では、近畿圏にあるA大学の特別活動論で実践したB中学校での運動会の支援活動を通し、学生の学びがどのように深まったのかを、学生の書きとったレポートをもとに考察を進める。講義で学んだ内容がどのように実践的指導力として身についたのか、特別活動を実施するうえで、どのような力が必要なのか、学生の学びから読み取り、今後の教育活動の知見を得ることが本論文の目的である。

Key Words：特別活動，実践的指導力，現場体験活動，振り返り，省察

### 1. はじめに

わが国の教員養成制度はひとつの転換点にある。例えば、2020年より新たな学習指導要領が小学校を皮切りに施行される。今回の学習指導要領改訂の大きな点は、主体的・対話的で深い学びを進めるための教育方法について言及していることである。これまでの学習指導要領改訂は学習内容や学習時間の多寡を明らかにするにとどめており、教師がどのように子どもたちに指導するのかは、いわば教師自身の主体性に委ねられていた。

しかし、今回の学習指導要領では、子どもたちの学びをより深めるために「教科等の指導内容については、（中略）主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能

力を育む効果的な指導ができるようにすること」が求められており、各教科を中心に子どもたちの学習過程を重視した授業が求められている。総則では、教育課程の実施と学習評価において「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」について、具体例として国語科や情報活用、主体的な学びのための学校図書館の活用などに言及している。

こうした学習方法や子どもたちの主体性の涵養を促すための学習活動について、これまでの学習指導要領で触れられることはほとんどなかったが、今回の学習指導要領では総則のみならず、各教科や道徳科、外国語活動や特別活動など、多岐にわたり同様の記述がみられる。

主体的・対話的で深い学びとして注目を集めているのが、アクティブラーニングである。ア

クティブラーニングは、学習者の能動的な学びを促進するため、調べ学習や発表、質疑応答を行い、子どもたちが意見や調べた内容をもとに学びを深める活動を指している。これまでの授業や学習の中心が教師から子どもたちに教える、一方向的な教授からの転換だとも指摘されている。アクティブラーニングそのものは、2000年後半頃から大学などの高等教育を中心に行われており、それが義務教育段階に導入されたと考えられる。

一方的に享受される学習と異なり、アクティブラーニングを行うことで学生の能動的な学びが促進され、学習の定着が図られる、予測困難な未来を生きる子どもたちにとって、答えのない問いを考える力が必要といった声に代表されるように、アクティブラーニングの学びはどの学校段階であっても必要だと感じられる。

しかし、こうしたアクティブラーニング型の学びについて、小針誠（2018）は実践上の課題として①基礎的な知識技能の必要性、②教師の力量、③アクティブラーニングの限界の把握④意欲や動機づけの限界、の4つを指摘<sup>(1)</sup>し、アクティブラーニングによって子どもたちの学びの主体性を引き出せない教師にすべての責任を負わせる危険性や思想統制につながる政治性について警鐘を鳴らす。

## 2. 実践的指導力をどのように養成するのか

教育の方向性が前述したような学習者の主体性や学びの深さに焦点が当てられる一方で、教師を志す学生に求められているのが実践的指導力である。2000年代中頃からの団塊世代の大量退職により、近年の教員採用は定員を増やし、教員確保に努めている。新規採用者の多くは1年目から担任業務を行うことになり、学校現場の最前線に臨むことになる。この現状から、教職課程を有する大学を中心に行われてき

たのが学校現場でのインターンシップやボランティアなどの現場体験活動であった。大学の講義では理解しきれない学校現場の現実を教材とし、実践活動を通じて大学での理論と実践を往還する学びが奨励されたのである。

大学生の現場体験活動は人材不足である学校現場においても歓迎され、首都圏や近畿圏を中心に、現在では多くの大学で導入が進められており、教職課程に在籍する学生が教育実習を除いた現場体験をまったく行わずに卒業することは少数派だといえる。また、多くの都道府県の教員採用試験においても、出願用紙に現場体験活動に関する記述が求められているため、教師になるためには学校現場に行き、学校での現実的な課題や困難を学生のうちに目の当たりにして、自分ごととして考えるといった姿勢が求められている。

現場体験活動は教職課程に在籍する学生にとっては身近なものになりつつある。授業の単位として認定されるか否かは大学の判断によるが、多くの学生は小中学校へ教育実習以前から関わる機会が増えているのである。

しかし、現場体験活動にもいくつか課題がある。

ひとつめに現場体験活動の多くは学生のボランティアであることが多く、アクティブラーニングと同様に学生の主体性が重要だという点である。京都府教育委員会が主催するインターンシップ事業のように活動の事前事後に振り返りを行い、活動中も指導教諭がきちんと現場での指導にあたるような、一貫した活動を行っている大学や教育委員会はごくわずかにとどまり、多くの大学で行われているのは各大学や教育委員会から募集のあるボランティアに学生が連絡をとり、学校に直接連絡を取るといった形態である。したがって、活動の内容を振り返ったり、事前の注意事項、生徒の実情などを正確に把握したりすることは困難な場合が多い。

二つ目に、現場体験活動の内容の不均等の問題である。多くの学校現場に大学生がボランティアで入ることは珍しいものではなくなったが、その活動内容は学校によって相当の温度差が見られる。授業のティーチングアシスタントとして教材研究に関わり、子どもたちに直接授業をするような高度な技術を伴うもの、特別な支援を必要とする子どもの学習・生活支援といった専門的な知識を要するものから、プリントのコピーや清掃、事務処理などの雑用まで多岐にわたる。その上、それらの活動を系統的に振り返る機会があるかどうかも学校に委ねられているため、学生にとって実りある活動になったのかどうか、学校によって大きな違いが見られることである。

例えば、首都圏や近畿圏のように現場体験活動が一般化しつつある地域においては、学校現場にも大学生を指導するための経験が豊富だが、地方都市になると、そもそも大学生ボランティアを受け入れたことがないという学校があり、どのように大学生を指導すればいいのかわからないところも少なくない。結果として、雑用係のような仕事を押し付けられてしまう事例も見られる。せっかく現場体験活動を行っているのに、活動に系統性がないためにイベント的なものに終始してしまう恐れがある。

三つ目に、現場体験活動の検証研究の少なさである。現場体験活動がはじめられたのは2000年代中頃からといわれている。全国私立大学教職課程教育研究協議会の調査では、2005年に現場体験活動に関する調査<sup>(2)</sup>を行っている。当時はまだ先進的な取り組みを行っている少数の大学にとどまっていたが、現在はその割合は大幅に上昇していることが予想され、大学時代に現場体験活動を経て教師となった者も多くなってきている。しかし、現場体験活動を経験した教師の声が現状の現場体験の効果や検証に反映された研究はごく一部にとどまり、「現

場体験活動をすれば教師としての実践的指導力が向上する」と盲信的に促えられていることは、大きな問題である。昨今の教職志望者の減少傾向を考えると、ますます教職志望の大学生には学校現場に立つときの困難をある程度予測し、それらの対応を考える等の学習は不可欠である。

以上のような課題を踏まえ、本論文では近畿圏のA大学の集中講義で行った「特別活動論」の取り組みを対象とし、学生の実践的指導力のどの部分に気づきが見られたのかを考察する。

### 3. フィールドワークから

#### －「特別活動論」の授業を通して－

この授業では、授業期間中に実際に大学近隣のB中学校の運動会にボランティアとして前日の準備から参加する。運動会前日には管理職や生徒指導担当からB中学校の変遷や生徒たちの特質について講義を受け、当日に臨む。運動会当日はシフト制でいくつかの部分を担当する（表1参照）。

表1 運動会当日の担当場所と人数（午前／午後で入れ替え）

担当場所	自転車整理	決勝	救護	整列・召集	撮影
人数	5	2	2	4	2

特別活動論の授業の流れは以下のとおりである。

授業は夏季休業中の集中講義である9月上旬に3日間で行った。これはB中学校の運動会が9月の第一土曜日に開催されることに配慮した日程である。1日目は特別活動に関する理論的な内容を取り扱う。とくに学校での非日常を感じることや、子どもたちの主体的な取り組みであること、経験的な活動を通してどのように子どもたちの人間関係のつながりを担保するのかといった特別活動の特質を中心にアクティブ

ラーニングを取り入れながら講義を進める。2日目の午前中は学校行事のひとつである健康安全・体育的行事としての運動会について理解を深め、午後の運動会準備に向けでの学校現場での視点について考える時間としている。初日の理論を踏まえつつ、学校現場でどのようなことに注意する必要があるのか、先生方や子どもたちにもどのように対峙するのかも含めて講義を行う。午後にはB中学校に移動し、運動会前日の準備を他の先生方と一緒にを行い、終了後に校長や生徒指導担当の先生からB中学校の概要や生徒の特徴について、講義を行ってもらい、学生が準備中に感じた疑問や質問に答えてもらう時間を設ける。

ここで重要なのは、いきなり運動会に参加するのではなく、生徒や学校の特徴をきちんと踏まえた上で運動会に臨むことである。現場体験活動にありがちな問題として、マンパワー不足の部分を大学生に埋めてもらうために、学校の状況や生徒の特質などをまったく伝えずに学校に入ることになる大学生が少なくない。こうした活動は、確かに子どもたちや教師の活動を参観できるが、その後に自分の活動でどのような気づきを得たのか、振り返ったときにまとめることができない場合が多く、活動に参加する意味が見出しにくいのである。この講義では、中学校や子どもたち自身の状況を事前に把握し、当日までにどんな部分を考察するのか、何に気を付ける必要があるのか、理解したうえで運動会に臨むことができる。

また、運動会終了後には、校長先生や生徒指導担当の先生とともに運動会の振り返りを行い、教師の声掛けや環境づくりについての質疑応答の時間もあること、活動後授業のレポートとして活動を振り返る必要があるため、やりっぱなしの活動になることも少ない。

A大学の特別活動論では学習指導要領や先行研究をもとに理論的な学びを前半に踏まえ、現

職教員からの実態についての講義を行った後に運動会のスタッフとして参加し、実践的な教育活動に関わる構成となっている。ボランティアのように振り返りがほとんどない活動にならず、理論と実践を系統的に学ぶことになり、学生の理解を促すように工夫されている。

### 3-1. C市およびB中学校の概要

B中学校は近畿圏にある市町村であるC市にある中学校である。C市は人口10万人弱という近畿圏の市町村では中規模程度の市である。市内の地区によってはかなりの大規模校もあるが、今回の対象校であるB中学校は1学年3クラス、合計9クラスの中規模校である。色別のブロックは3つあり、それぞれの学年から1クラスが所属し、学年別とブロック別で競技を行っている。

運動会の準備は主として委員会や体育会系の部活動に所属している生徒が中心となっており。この理由について、クラス全体よりも部活動単位の方が教師も生徒を指導しやすく、生徒も部活動の顧問の先生の指示にはきちんと動くといった学校の特徴がある。また、部活動ごとで準備するものや手順はほぼ毎年同じであるため、部活動単位で動くことで、昨年の様子を知っている上級生が下級生の指導もしやすく、活動の見通しも立ちやすいというメリットがあると考えられる。

### 3-2. 学生のレポートより

それでは、学生はこの講義を通してどのような実践的指導力を養成できたのであろうか。ここでは学生の最終レポートをもとに考察を進めていきたい。レポートのなかで複数の学生が指摘したのは（1）生徒理解、（2）教師の動き、声掛け、（3）保護者と教師の関わりの3点であった。



### (1) 生徒理解

受講している学生の多くが中学校および高等学校免許の取得を希望しているが、実際に中学生や高校生と関わる活動をしていたり、塾などの子どもと関わるアルバイトをしていたりする学生は2名と少なく、中学生だった過去の自分と比較して考察している部分が多く見られた。

今回運動会のボランティアに参加して学校の空気に触れてみて私の思いは一蹴された。準備の段階から様々な部活動の生徒たちが協力しあい、100メートル走を走り終えた生徒たち全員に同じチームから声援が飛び交っていた<sup>①</sup>。特別活動を一つのツールとして、絆を育んでいるように感じた。「絆が人を変える」、「つながりが人を支える」、「人と関われば人は育つ」ボランティアには参加した時間は、それらをまさに実感した時間であった。

弱音を吐く子どもが少なかったということである。運動会の前日に生徒と教師の方々と準備をしていた時、子どもたちを観察していたのだが、私が見ていた子どもたちは誰一人として不満を口にしていなかった。私が中学生の頃は不満を口にしていた記憶があるが、B中学校の生徒からは不満が出ることがなく、自ら進んで準備に取り掛かっていた。少し前まではとても荒れていたと聞いたが、そのことが想像もつかないくらいであった<sup>②</sup>。

私は、体育大会前日の補助に行った際、校長先生からのお話で、少し前までB中学校が荒れていたことを聞いて、非常に不安だった。(中略)しかし、私は、体育大会当日のB中学校では、朝から生徒が登校してくるのを見かけたらできるだけ「生徒一人ひとりに対して」挨拶していることが伝わるように挨拶をするように心がけた。もしかしたら、無視されるかもしれないと考えていたが、しっかり挨拶を返してくれる子が多く<sup>③</sup>、驚きつつも感動した。そして、体育大会の開会式や閉会式などの際には、生徒たち

は私語をせずに黙って壇上に立つ先生や生徒の話を聞いていた。盛り上がる場所は盛り上がり、静かにすべきところでは静かにするというメリハリがあり、私が考えているような、荒れている学校とはかけ離れた存在で非常に驚いた。数年前まで荒れていた学校とは思えないほどにマナーが行き届いていると感じた。先生も「一緒に」喜んだり、楽しんだりすることが生徒たちの「自己肯定観」につながるのだろうと考えた。

学生は運動会前日の校長先生の話から、B中学校が以前荒れていた中学であることを聞き、少しの不安を抱えながら当日を迎えたが、下線部①、②、③のように生徒自身の主体性や意欲を強く感じていることである。もし、前日の校長先生の話がなければあえてレポートに記載するような内容ではないかもしれない。しかし、学校の状況を理解できたからこそ、生徒自身の成長を感じることができたと考えられる。

### (2) 教師の動き

子どもたちの成長の裏には、教師の働きかけや関わりが重要であることは論を待たない。B中学校の運動会は準備や放送、進行などもほぼ生徒が主体となって行っている。しかし、B中学校の教師は生徒が効率よく運営するためにさまざまな配慮をしている。レポートでは①対生徒とのやりとり、②運動会での安全への配慮を中心に考察を進めている学生が多く見られた。

第一に目にとまったことは先生がどんな時でも感謝や労いの言葉を生徒たちに述べていた<sup>④</sup>ことだ。例えば、競技に必要なものを運んでもらった時に先生方は「ありがう」といったり、100メートル走が終ったあとの生徒たちに「お疲れ様」、「よくがんばったね」等ということがとても印象に残った。このことは、先生と生徒のつながりと言うものを作る一つ

の方法なのではないかと考え、同時に人格の陶冶（公民的資質を育てる）こともできるのではないかと思う。

体育祭当日に校庭で朝の挨拶をしていた時である。2人の生徒が遅刻してきた。教師は怒らずなぜ遅刻してきたか。次遅刻しないようにするにはどうするか、という事を聞いていた。私は理由を聞くにしてもまずは遅刻をしてはいけない事を生徒に言うと思っていたがそうではなかった。教師は一切きつい口調や強い口調では話さなかった<sup>⑤</sup>。生徒は校庭に入ってきたときには、少し反省したような態度であった。このような、態度がみられたので教師は遅刻した原因と次遅刻をしないようにはどうするかを生徒と一緒に考えて考えた私は考える。

体育祭の当日、私が決勝審判の手伝いをしていた時も、ただ「頑張った、すごい」、「速かったなあ」だけでなく生徒のことを具体的に褒めていらっしやった<sup>⑥</sup>。これは、先生がいつも生徒のことを観察し、それぞれの生徒にあった声かけを意識しているからではないかと考えた。声かけ一つでこんなにも生徒の気持ちに変化するということを実感することができた。

生徒一人一人に敬称をつけ<sup>⑦</sup>、自己肯定感を上げてあげるだけでこんなにも変化が出ると知り、とても驚いた。自己肯定感を上げてあげるための行動をし始めてからどのような変化が起きたのか、その工程を詳しく知りたいと感じた。

生徒の名前を苗字ではなく、下の名前と呼んでいる教師の方が多かった<sup>⑧</sup>ということである。これはあくまで私の推測でしかないのだが、生徒を下の名前で呼んであげることによって、教師と生徒が親しみやすくなるのではないかと感じた。名前の呼び方ひとつ工夫するだけでも生徒に親近感を持ってもらいやすくなり、何でも話せる、何でも相談できる関係

づくりにつながるのではないかと想像できた。しかし、友達のような関係にならず、あくまでも生徒と教師という位置を保つことも大事なのだ<sup>⑨</sup>と実感した。

また、先生が生徒を座らせるときに全員に指示もしていたが、一人一人の名前を呼びながら座らせていた<sup>⑩</sup>。そうすることで今自分がしなければいけないという意識が変わる。私はこのような場面を見て、B中学校の先生は生徒一人一人を見て、得意なこと、特徴をすべて把握しているように思えたのだ。“オンリーワン”の声掛けは大切だと気付くことができた。“オンリーワン”の声掛けができることで、生徒は見られているのだ、見守られているのだと感じるようになる。

生徒と先生の距離が近いように感じられた。例えば、先生は生徒のことを下の名前で呼び、生徒もあまり物怖じせずに先生に話しかけに来ているところをよく見かけた<sup>⑪</sup>。前日に校長先生からのお話を聞いていたこともあり、先生や生徒の行動についてしっかり観察できたと考える。私が中学生の時は、先生から下の名前で呼ばれたことなどなかった。

運動会の当日の時も、準備の日もそうだが、生徒が寄っている先生には特徴があると分かった。よく笑っている先生や、冗談交じりの話をしていたり、生徒の話に共感していたりする先生が多かった<sup>⑫</sup>のをよく見かけていた。先生の中でも自分の仕事に必死で生徒を見れていなかったり、笑顔がなくしかめっ面の先生もいた。いろんな先生がいるのだと観察していた。全体を広く見回すと大きな違いや小さな気になるところまで見ることができたのがとても良かった。

このレポートを提出した学生の多くは、教師と生徒とのやりとりについて記述している。とりわけ、B中学校では下線部⑦、⑧、⑩のよう

に生徒を下の名前＋敬称で呼ぶ様子が見られ、生徒との信頼関係を築く様子が明記されている。そのことで、生徒自身も下線部⑪のように教師に気軽に話しかけている様子が見られ、生徒と教師とのやり取りがさかんな学校であるという印象をもつ学生が多かった。その一方で、下線部⑨のように、生徒と教師の位置を保つことの重要性に言及している学生もあり、生徒と関係を作ることと同時にいかに教師として生徒と接するののかについて考える学生が見られた。

中学生は思春期にあたる時期であるため、大人との関係を築くには難しい側面がある。しかし、B中学校では教師が生徒に寄り添い、下線部④や⑤のように一人の人間として接している場面がいくつも見られる。こうした生徒理解のもとに、以前荒れていたB中学校は落ち着きを取り戻してきたと考えられるのである。

今回私は、看板が倒れかけていて、それを見つけた先生が、生徒が下敷きになってけがをしないように補強していること⑩に気が付いた。この時に私は先生の視野の広さの重要性に気づくことができた。

運動会の最中に一人の先生が競技の終了直後に体調が悪くなっていたと思われる生徒に大丈夫かと真っ先に声をかけて救護のもとへと連れて行った⑫のだ。運動会という場では普段教室で座って授業を聞く時よりもイレギュラーなできごとが多く発生し、教師は適時適切な対応を行っていかなければならず、そのためにはいち早くあらゆる側面に気づく幅広い視野を持たなければならないということを理解させられた。

この先生は生徒には見えないところでの気遣いがあり、体育祭の種目である、棒引きの棒が日にあたっているのをみて生徒が熱いと騒ぐことを察して布で日に当たらないようにしていた⑬。この先生は他にも私や生徒が気づかないところで、広い視野で周りを

みて様々な気遣い、思いやりがあることがわかる。

運動会はどうしても生徒同士が競い合うため、ケガをしたり、不注意から転んだりすることが多くなる。また、生徒自身も競技に集中しているため、周りに目を配る余裕がない場合が多い。教師はそうした生徒自身も気づいていない危険を察知し、対応する必要がある。下線部⑬、⑭、⑮のように生徒の危険や体調に気を配り、迅速に対応する必要がある。こうした運動会では気づきにくい教師の動線について言及するレポートが見られた。

### (3) 保護者と教師との関わり

特別活動、とりわけ運動会に参加することでもっともよく目にするのが保護者と教師とのかかわりである。運動会は多くの保護者が来学する学校行事であるため、教師はどのように保護者と関わるのか、どのような配慮をしているのかという点が見やすい。学生のレポートにも保護者と教師の関わりに関する記述がみられる。

運動会当日、私がテントの辺りに居た時、私の目の前でと生徒が競技準備のことに関して話をしていた。その時ふと横を見ると、保護者の方がその様子を見て、笑顔で写真を撮っている所を目撃⑯した。普段見ることのできない自分の子どもの学校での顔を見ることが出来る場であり、授業よりも先生との距離が近く、活発にいきいきとした姿を見ることが出来る場が運動会であるということを今回の実習で見え気づくことができた。保護者の方も、家庭では見ることのできない自分の子どもの姿、生徒としての姿を見ることができ、嬉しかったのだと感じた。

先生と保護者の間に関する事柄について述べていきたいと思う。私が、先生と保護者とのつながりが強いと感じた部分は私が保護者の人の対応にあたり

その事を先生に伝えに行った時、保護者の人の名前も言っていないのに先生はすぐに当該生徒が分かった<sup>⑮</sup>という部分である。これは、普段の保護者への連絡や三者面談の時に大事なことだと思う。そして、ここをしっかりおこなっておくと、特別活動をやっている時にも保護者の人への柔軟な対応ができるのではないかと考えた。このことはB中学校では1人の先生だけに言えることではなかった。なぜなら、2回目の保護者の人の対応にあたりそのことを先生に伝えに行くと、その先生も名前を伝える前にすぐに当該生徒に気付かれた。これは、学校全体の先生、どの先生にも言えることなのではないかと2回目を感じた。

特別活動の講義において、触れる機会に乏しいのが保護者対応に関する内容である。学習指導要領における学級活動や生徒会活動、学校行事について取り扱うが、保護者との関わりを授業で取り上げることはほとんどない。ゆえに、運動会での保護者と教師の関わりは授業では知ることのできないものである。レポートを提出した学生もそれを理解しており、下線部<sup>⑮</sup>や<sup>⑯</sup>のように保護者と教師との関わりについて具体的に明記している。わが子が教師とやり取りする姿を写真に撮ったり、ボランティアの学生から聞いた話ですぐに保護者のもとに向かう教師を見て、学生は日頃の保護者とのやりとりを予想し、その重要性を感じたのである。

#### （4）講義内容と実践の取り組みとの関連

運動会に参加するなかで、学生は授業で学んだ内容が実際の学校現場でどのように展開しているのか、理解を深めたと考えられる記述がいくつか見られる、

特別活動は授業と違う環境で、生徒の違う頑張りを  
見ることができる場面であり、親や教師が普段見る  
ことのできない生徒の様子を見ることができる<sup>⑰</sup>。

特別な大きい行事であるため裏の動きは大変で、その活動も経験させていただけたのでとても勉強になった。

日頃の小さな出来事や日常会話合めて、小さな事から生徒と教師間での信頼関係を築いていかないといけない。信頼関係の深さこそが特別活動で生かされると考える<sup>⑱</sup>。そのために様々な教育的な技法はあるが、特別活動の根本はそこだと考える。生徒には見せることができない部分やいわゆる裏の部分がある。あまり良くない表現かもしれないがそのような部分も上手く使わないといけないかもしれない。3日間という短い期間だったが私が全く知らない教師の姿がある事や自分の考えと生の学校の現場の考えがちがう事もあった。私は、考えの違いがあっても、そのようなことを知ったというのはこの講義の中で1番大きなことだと考える。

私は塾で講師をしていて、よく中学生に英語を教えている。その時に感じるのは、やる気の引き出し方についてだ。私は、どの生徒にも共通していることがあると感じる。それは、勉強以外の話でコミュニケーションを取っているかどうか<sup>⑲</sup>だ。私は、勉強の話しかしない生徒よりも様々なことを話す生徒の方が、私の教えた内容をしっかりと覚えようとしてくれているように感じる。

特別活動は学校での非日常を感じる場であると授業で学んだことが、下線部<sup>⑱</sup>のように経験を踏まえて学んだ様子が見られる。また、下線部<sup>⑲</sup>のように、たった3日間の講義や運動会を経て、特別活動において信頼関係がもっとも根本にあると学生が感じている。さらには、自分のアルバイトの経験も踏まえ、下線部<sup>⑳</sup>のように生徒と学習以外の部分でコミュニケーションをとることが生徒理解につながり、結果として教科指導にも好影響を与えると考える学生が見られた。



以上のように、3日間の講義や運動会を通して、学生は生徒理解や教師の配慮、保護者対応などの分野で実践的指導力となる知見を得られていることが明らかになったのである。

#### 4. 特別活動に参加した学生は実践的指導力をどのように身につけるのか

最後に、本論文で明らかになった知見を整理し、まとめにかえたい。

特別活動に参加した学生が得た実践的指導力は以下の4つである。

##### ① 中学生の特性を踏まえた生徒理解

B中学校の変遷やこれまでの課題を管理職や生徒指導担当から講義を受けたことにより、当日に参加するだけでなく、生徒の現状や課題について情報共有が図られ、たった1日半の活動であっても、生徒自身の主体性や積極性、意欲を認めるレポートが散見された。

##### ② 特別活動を迎えるにあたっての教師の配慮や生徒との関わり

特別活動において、生徒と教師の信頼関係は活動の成功のカギを握っているといっても過言ではない。B中学校では、生徒を一人の人間として尊重しつつ、教師として生徒の理解に努める姿がしばしば見られた。また、生徒がケガや体調を崩さないためにしっかりと生徒を見守り、安全への配慮をどの教師も怠らない姿が見られた。

##### ③ 保護者と教師のつながりを感じる関わり

特別活動の授業では、保護者に関する内容を取り扱うことはごくわずかだが、運動会当日は多くの保護者が子どもたちの姿を見るために学校にやってくる。そこで、教師は保護者とどのようなやり取りをするのか、保護者に対して教師はどのような態度で臨むのか、保護者は教師に対してどのような思いで接しているのか、教科書から学び取ることは難しい。これは現場体験活動でしか見ることでできない場面である。

運動会終了後には保護者対応について校長先生に質問をする学生がおり、学生の興味関心も高いことが伺える。

##### ④ 授業で学んだ内容が実際の運動会ではどのように展開されているのか

初日や2日目の午前中に学んだ特別活動の理論的な内容が、実際の中学校ではどのように展開され、学校や教師によってどう「翻訳」されているのか、学生が目にする機会はあっても、「翻訳」された内容を検討する振り返りの時間や、大学教員からの解釈を説明されることはほとんどない。特別活動の理論が実践の場でどのように展開されているのか、振り返る時間や機会が提供されることによって、学生が考えるきっかけとなり得ていることが伺える。

以上の考察から、特別活動に参加した学生は4つの実践的指導力を身につけつつあると指摘できる。しかし、ここで留意しなければならないのは、実践的指導力を身につけるためには学校現場と大学教員との綿密な打ち合わせが必要であることや、お互いの領域に対して謙虚な気持ちで学び、生徒の声ややりとりに丁寧に耳を傾けることが重要であるという点である。運動会のような単発的な活動は、日常に学校現場に入り込んでいない学生が参加したとしても、今回のレポートのような気付きを得ることは難しく、当該学校の状況や文化をきちんと理解することが必要となる。イベント的な現場体験活動では実践的指導力を身につけることはできない。大学と学校現場が連携して講義と実践を組み合わせる必要があるのだ。

【付記】

本稿は抄録，1を原が，2，3，4を浅田が担当したが，その責任は両者が等しく負うものである。

【注記】

- (1) 小針誠（2018）『アクティブラーニング』講談社，pp.225-244
- (2) 全国私立大学教職課程教育研究協議会（2010）『現場体験型教員養成の実態と課題』

【参考文献】

- 小針誠（2018）『アクティブラーニング』講談社
- 田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著（2016）『学校インターンシップの科学』ナカニシヤ出版
- 全国私立大学教職課程教育研究協議会（2010）『現場体験型教員養成の実態と課題』
- 原清治・芦原典子（2019）「学校インターンシップは教育実習の機能をどこまで代替できるか」『佛教大学教育学部論集』第30号，pp.1-15
- 原清治・芦原典子（2006）「実践的教員養成のあり方に関する研究（2）スクールボランティアと教育実習の関係から」『佛教大学教育学部論集』第17号，pp.81-98
- 原清治・檜垣公明（2009）『深く考え，実践する特別活動の創造』学文社

（あさだ ひとみ 華頂短期大学）

（はら きよはる 教育学部）